山形県埋蔵文化財調査報告書第95集

県指定史跡

安久津古墳群

1985

山 形 県 教 育 委 員 会

県指定史跡

安久津古墳群

北目1号墳・鳥居町9号墳発掘調査報告書

昭和60年3月

山　形　県　教　育　委　員　会

序

山形県は，特に自然に恵まれた土地柄であり，そこで培かわれた人々の暮らしの足跡は，はるか３万年も前と聞いております。

旧石器時代から古墳時代にかけての遺跡の分布は多く，発見された資料は日本考古学界でも高く評価されております。

山形県教育委員会としましては，貴重な文化財の保存と活用の必要から，昭和56年度に風土記の丘（歴史公園）の実態調査を実施してまいりました。

今回の安久津古墳群の発掘調査はその一環であり，その結果は，山形県のはじまりとされる「出羽の国」の成立に関する新らたな多くの資料を提供いたしました。

安久津古墳群は，従来北目古墳群・羽山古墳・源福寺古墳群・加茂山洞窟古墳・安久津古墳群・味噌根古墳群・鳥居町古墳群と呼ばれていた古墳群を一括総称したものであり，本県において古墳時代後期から終末期にかけての群集墳の形態が良く保存されている遺跡で，昭和59年７月17日に県の史跡になっております。

本報告書が，山形県の歴史の空白の部分を少しでも明らかにし，また文化財に対する深い理解をいただければ，幸いです。

末筆ではありますが調査にあたってご指導をいただいた文化庁・奈良国立文化財研究所，高畠町に対し深く感謝の意を表します。

昭和60年３月

山形県教育委員会

教育長　大　竹　正　治

目　次

I　調査の経緯……1
II　位置と環境……3
III　安久津古墳の概観……3
　1　北目古墳群……4
　2　羽山古墳……4
　3　源福寺古墳群……4
　4　加茂山洞窟古墳……4
　5　安久津古墳群……4
　6　味噌根古墳群……4
　7　鳥居町古墳群……4
IV　北目1号墳・鳥居町9号墳の調査…9
　1　北目1号墳……9
　2　鳥居町9号墳……17
V　まとめ……19

例　言

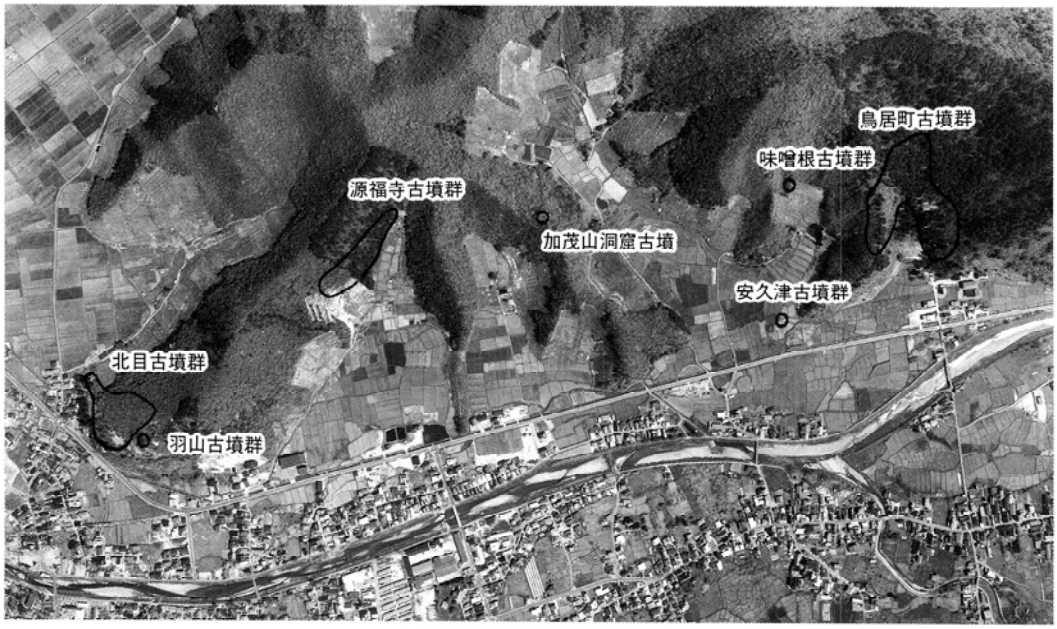
1　本報告書は，昭和59年6月14日から同年7月7日の18日間にわたる発掘調査とその後若干の補足調査を実施した安久津古墳群の報告書である。

2　安久津古墳群は，従来個別に北目古墳群，羽山古墳と呼称されていたものを時期・形態などから総称したもので昭和59年7月17日に県の史跡に指定された。

3　調査は，山形県教育委員会が主体となり，高畠町教育委員会の協力を得て実施した。

4　調査にあたり，文化庁記念物課河原純之主任調査官，黒崎直調査官のご指導をいただいた。

5　なお，本書は，北目1号墳・鳥居町9号墳の二基の発掘調査報告書である。



図版1　安久津古墳群航空写真

Ⅰ　調査の経緯

1　調査の動機

山形県は，昭和52年３月の「第６次山形県総合開発計画」及び「第２次山形県教育振興計画」において，県民のふるさととなるような代表的な史跡や文化財集中地域を中心にその広域的保存と活用から，風土記の丘（歴史公園）建設構想が提示され，山形県教育委員会では昭和56年に構想策定の為の実態調査を関係機関，関係市町の協力を得て実施された。

本調査は，実態調査に基づき，山形県を代表する比較的良好に残っている古墳時代終末期と考えられる安久津古墳群の時期・形態・特色を把握するため，昭和59年風土記の丘建設構想推進事業の一環として発掘調査を実施することとなった。

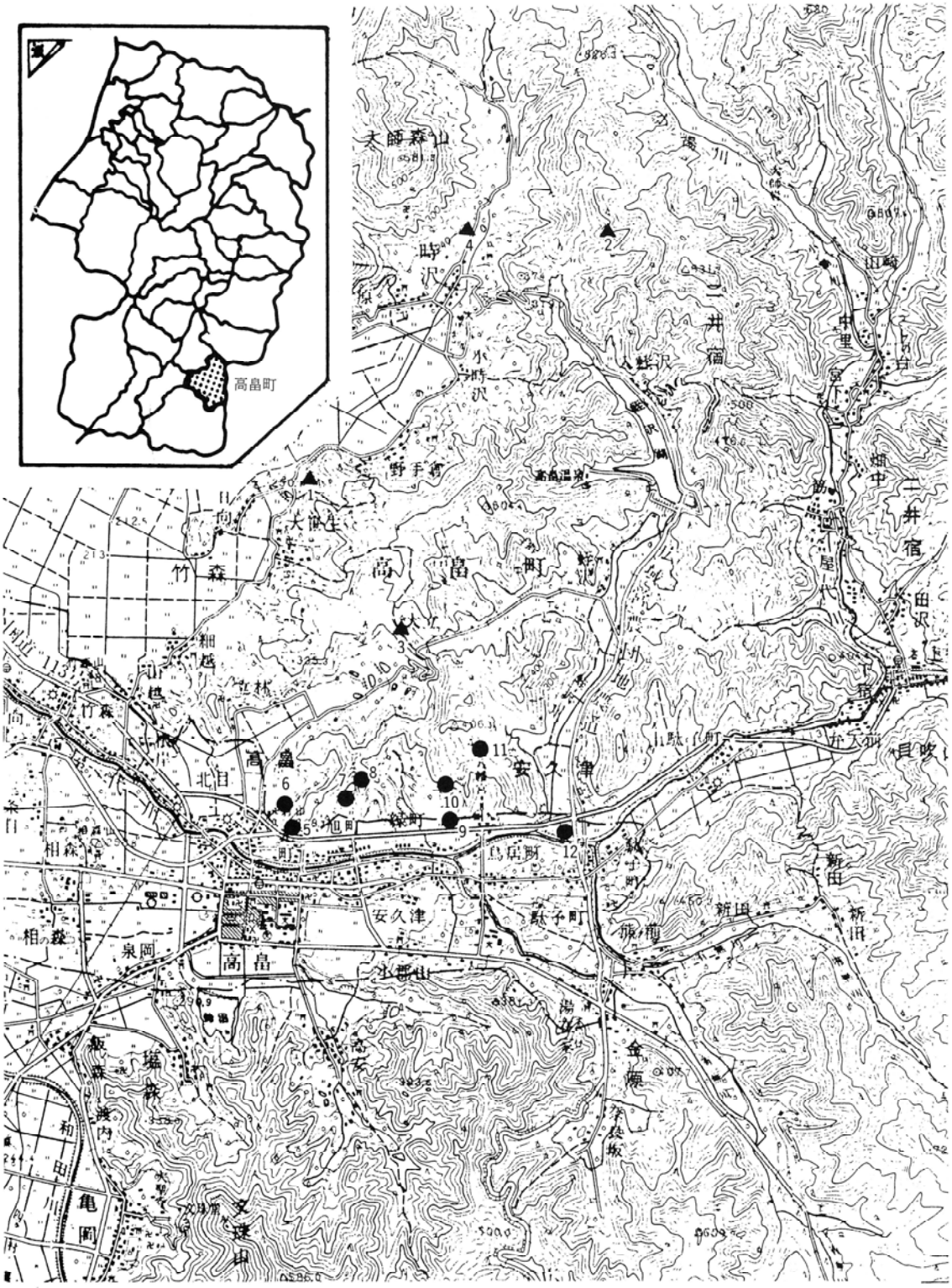
2　調査の経過

安久津古墳群は早くから多くの研究者に注目されており，中でも羽山古墳出上の勾玉類や多量の人骨は学史的にも高く評価されている。

昭和12年，早稲田大学西村真次氏の置賜地方の古墳調査にはじまり，戦後昭和33年には日向洞窟（昭和52年国指定）調査の折，山形大学柏倉亮吉氏，東京大学鈴木尚，同山内清男の両氏による羽山古墳出土の人骨の調査及び周辺遺跡の調査がなされている。

しかし本格的な学術発掘調査の機会がなく，古墳群の性格，墳丘の形態，規模，時期などが明らかにされないまま今日に至っていた。今回の調査はそうした問題の一部を究明するため，最も東西端に位置する北目１号墳，烏居町９号墳の二基について調査し，その後の保存についても併せて検討をおこなった。調査にあたっては，現地において奈良国立文化財研究所坪井清足所長，国学院大学小林達雄助教授，文化庁黒崎直調査官の適切な指導と助言をいただいた。二基の古墳は一部埋戻しや土止めを施し現地に保存されている。

図版２　羽山古墳出土人骨調査状況



第１図　国・県指定史跡位置図（S＝1：50,000）

国指定　1 日向洞窟　2 一の沢洞窟　3 大立洞窟　4 火箱岩洞窟

県指定　5 羽山古墳　6 北目古墳群　7 源福寺古墳群　8 加茂山洞窟古墳
9 安久津古墳群　10味噌根古墳群　11鳥居町古墳群　12清水前古墳群

II　位置と環境

1　安久津古墳群の位置

安久津古墳群は，山形県東置賜郡高畠町大字高畠・大字安久津に所在する。高畠町は古墳群の他に縄文時代草創期の国指定史跡である日向・一ノ沢・大立・火箱岩等の洞窟・岩陰遺跡が密集していることで県内はもとより全国的に知られている。

その位置は山形県の南部，東に蔵王連峰を境界とし，宮城・福島の両県に接する米沢盆地の東端にあり，標高560メートルの二井宿峠は以前から日本海と太平洋を結ぶ東西文化の経路であった。二井宿峠に源を発する屋代川は西進し最上川に注ぐ。本古墳群は屋代川の北第三紀層の凝灰岩が露頭する標高約250メートルの南面する山腹に群集する。また屋代川の南には現在も「小郡山」と呼ばれている由緒ある集落がある。

2　歴史的環境

奈良に都が造られて間もなくの和銅５年（712年）に出羽国が建置され，置賜と最上の２郡は陸奥国から出羽国に編入される。これ以前にも置賜郡については，持統天皇３年(689年）条に「陸奥国優嗜曇（うきたむのこほり）郡城養蝦夷（こうのえみし）……」という『日本書記」の記事がある。また近年の調査によって，置賜地方には南陽市稲荷森古墳・川西町天神森古墳・米沢市戸塚山山頂墳など，前方後円墳や前方後方墳の形態をもつ大型古墳が存在することが明らかになった。これらは５世紀頃に位置付けられ，古代置賜郡成立以前の成熟した社会状況を示している。

安久津古墳群の所在する高畠町は，金原古墳や清水前古墳など県内でももっとも多くの古墳がみられる地域である。７世紀から８世紀にかけて古墳は，奥羽山脈を越して宮城県白石市周辺にも多く分布しており，形態が横穴式石室を主とする円墳であることなど共通する点が多い。

III　安久津古墳群の概観

安久津古墳群が群集する屋代川の北山麓には以前そうとう数の古墳が存在していたと伝えられており，それらの痕跡や出土遺物が現在残っている。従来個別に呼称されていた西より北目古墳群・羽出古墳・源福寺古墳群・加茂山洞穴古墳・安久津古墳群・味噌根古墳群・鳥居町古墳群をこの度一括総称したもので古墳時代後期～終末期にかけての古墳群である。以前は約60数基存在していたと云われているが，現在その内の約半分の35基が現存しているのみである。平地に所在する安久津古墳群を除いて他は全て山麓に分布する山寄せの円墳である。主体部は地元の凝灰岩を用い玄室と羨道の明瞭に区別がつく横穴式石室

を呈している。玄室天井は高く約平均1.7メートル前後である。

伝世されている出土遺物も割合に豊富で勾玉等の玉類・金環・直刀・蕨手刀・刀子・鉄斧・鉄鏃などがある。また安久津古墳群の中で現在古墳は壊滅したが戦後28年頃三鼇環が発見されている。しかし残念ながら現在資料の所在が不明となっている。北目古墳の近くのこれも現在壊滅したが立林古墳より和同開珎が発見されており資料は現存しており，山形県内において最も出土遺物の多い古墳群である。(第1図)

1　北目古墳群

高畠町大字高畠字羽山に所在する。高畠町の北方羽山古墳で知られる羽山公園の北西斜面に現在13基確認されている。いずれも墳丘の長径が9メートル前後，高さ山側より2メートルの山寄せによる円墳であり，標高240～270メートル上に群集する。

2　羽山古墳

高畠町大字高畠字羽山に所在する。古墳に南面する標高270メートルの中腹，眼下に屋代川と肥沃な米沢盆地が一望に見わたせる絶景の位置にある。以前はこの羽山古墳の周辺には数10基の古墳が山腹から山麓にかけて展開していたと伝えられているが開墾や凝灰岩採取等により壊滅し現存するのは本古墳1基だけである。

明治27年発見，725個の玉類，直刀，金環，直刀，鉄鏃などの数は本古墳群中最も出土品の豊富な古墳である。また人骨も多量発見されており，追葬が行なわれたことが考えられる。

古墳は山寄せの円墳で横穴式石室をもつ。現在は玄室を残すのみであるがその規模は2.4メートル，高さ1.8メートル。側壁は天井にゆくに従い内に傾き天井石を支えている。

3　源福寺古墳群

高畠町大字高畠字源福寺山に4基山寄せによる横穴式石室を有する円墳

4　加茂山洞窟古墳

高畠町太字安久津字加茂山。自然洞窟利用の古墳で副葬品，人骨が出土している。

5　安久津古墳群

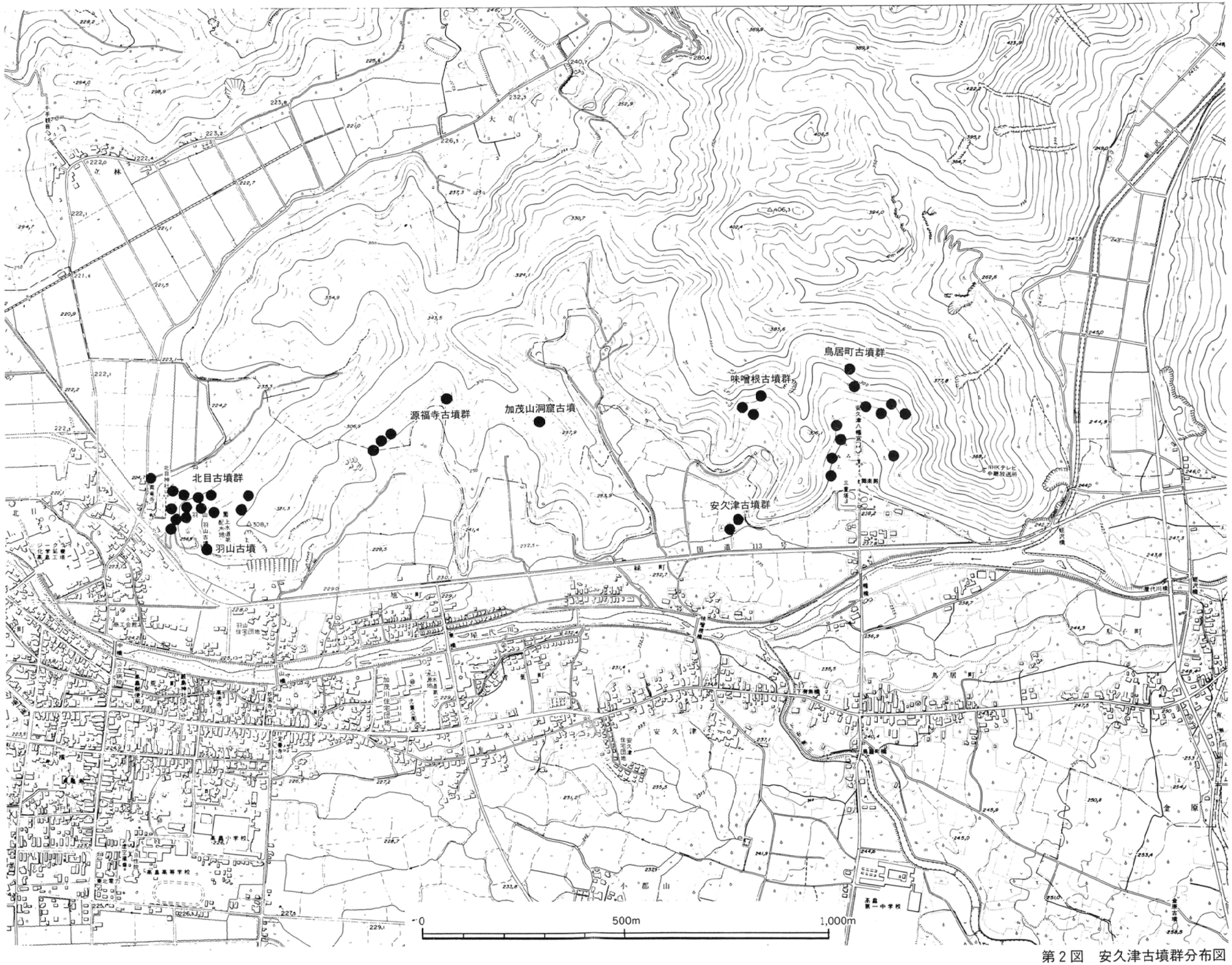
高畠町大字安久津字味噌根に所在，かつて出羽の七ツ森と称されていたが現在水田の中に2基横穴式石室を有する円墳がある。天井石は壊滅したが羨道・玄室は現存している。

6　味噌根古墳群

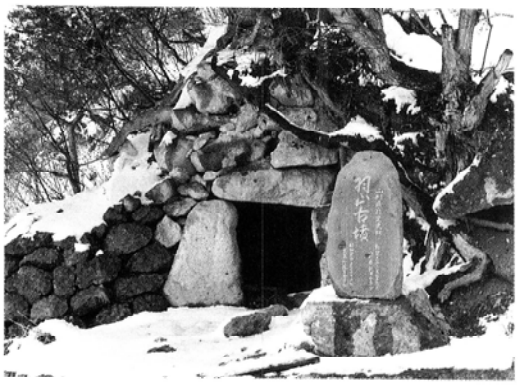
高畠町大字安久津字味噌根に所存，現在するもの3基で山寄せの横穴式石室を有する円墳。

7　鳥居町古墳群

高畠町大字安久津字八幡山に所在する。八幡神社境内裏にあり山寄せの円墳が11基現存する。比較的小規模な古墳であるが良く形状を残しており，出土品として須恵器・直刀・鉄鏃などがある。



第２図　安久津古墳群分布図



羽山古墳

羽山古墳出土勾玉類・金環

北目 7 号墳

源福寺 3 号墳

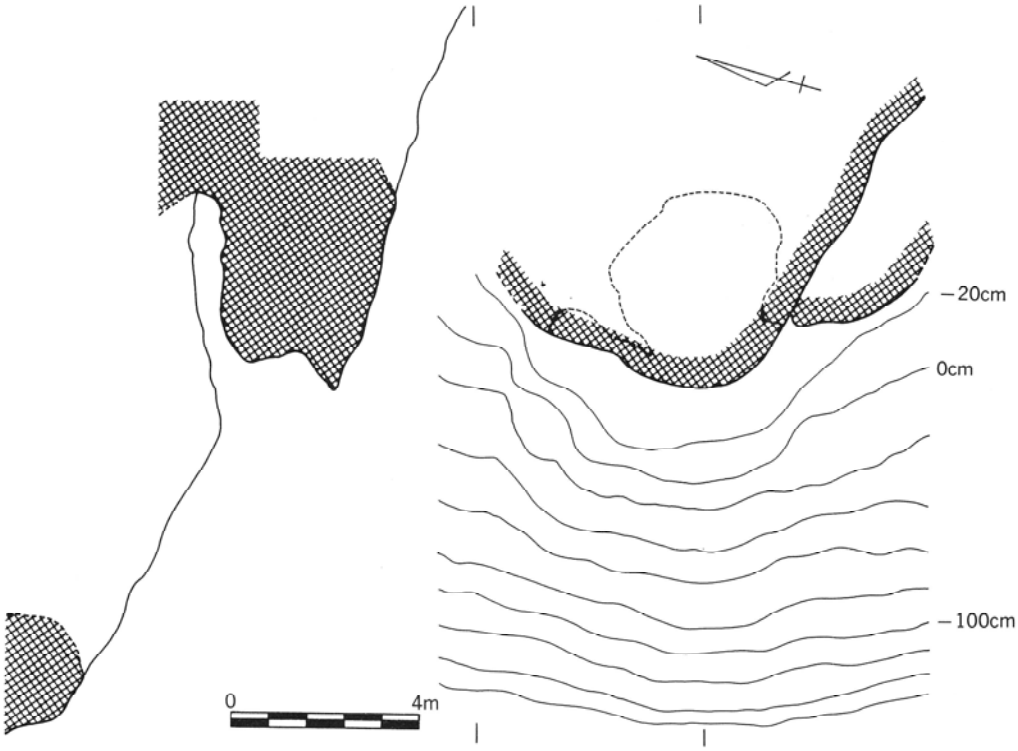
安久津 1 ・ 2 号墳

鳥居町 7 号墳

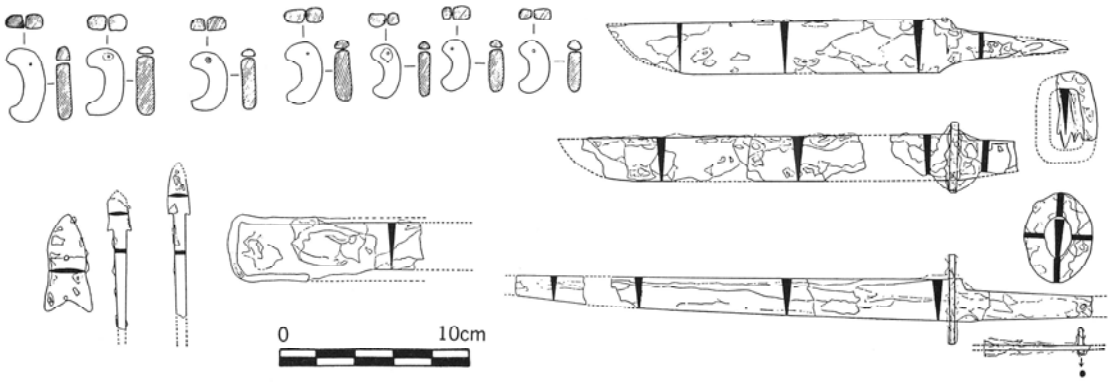
鳥居町 3 号墳

鳥居町 9 号墳

図版 3



第 3 図　加茂山洞窟古墳実測図



第 4 図　加茂山洞窟古墳出土遺物実測図

加茂山洞窟古墳全景

加茂山洞窟開口部

図版 4

IV　北目1号墳・鳥居町9号墳の調査

1　北目1号墳

安久津古墳群の中において最も西端に位置する古墳である。昭和58年12月に確認されたもので最も良く形状を残している。現状は雑木林であり一目で古墳と判断のつく立派なもので形態は横穴式石室をもつ円墳である。羽山の西緩斜面の中腹に山寄せ法によって構築されている。その為，谷側がある西方から見ると一見して古墳とわかるが，山側である東方より見ると，わずかに段のある平坦部に見え石室の一部である凝灰岩が露頭している。

1　墳　　丘（第6図，図版6）

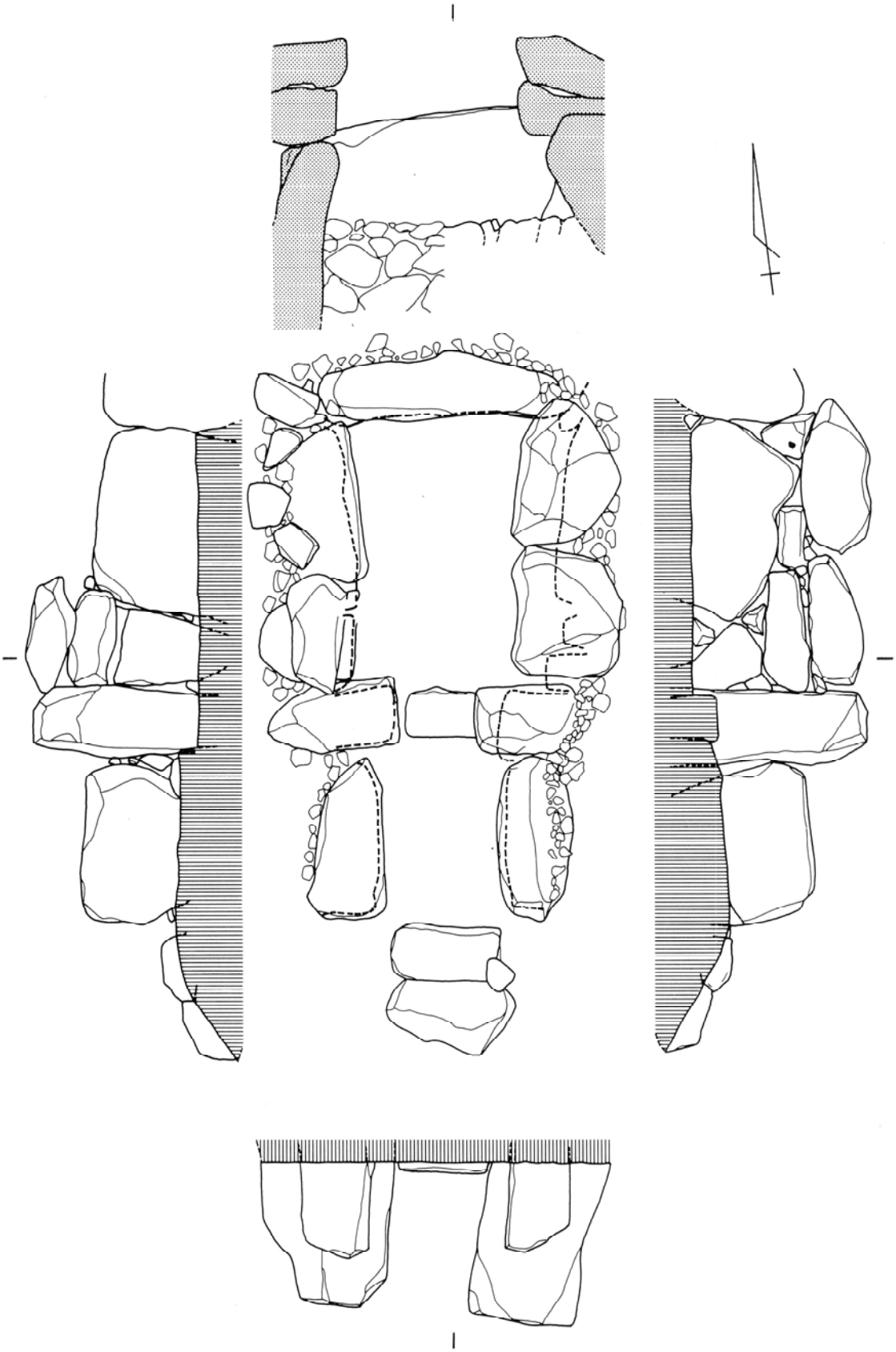
今回調査した1号墳は，北目古墳13基中山寄せ法の典型的な円墳である。従って谷側よりの高さは約4.5メートルと非常に高く，山側は0.5メートルと低い。谷側に比べてほとんど高さがない状態である。墳丘の北・南は以前石材を搬出するときに造られた溝状の凹地が縦に延び墳丘の裾が一部削り取られている。

墳頂は石室の一部が露頭し，採石の後盗掘にあったのか中央部が攪乱を受け凹んでいる。また，山側である東側は，封土の流れでほぼ平坦となり山よりの続きで舌状に張り出している。墳丘は封土の流出を防ぐため，裾部や石室の囲りに30～40センチ大の凝灰岩の外護列石が二重，三重に施されている。このような施設は周辺の古墳には見られなく，現在のところ本古墳だけである。また石室の裏込めに使われた河砂利が墳丘全体に散在しており特に羨道入口部には板状の凝灰岩2枚が階段状に施され，他の古墳と趣きを異にする古墳である。

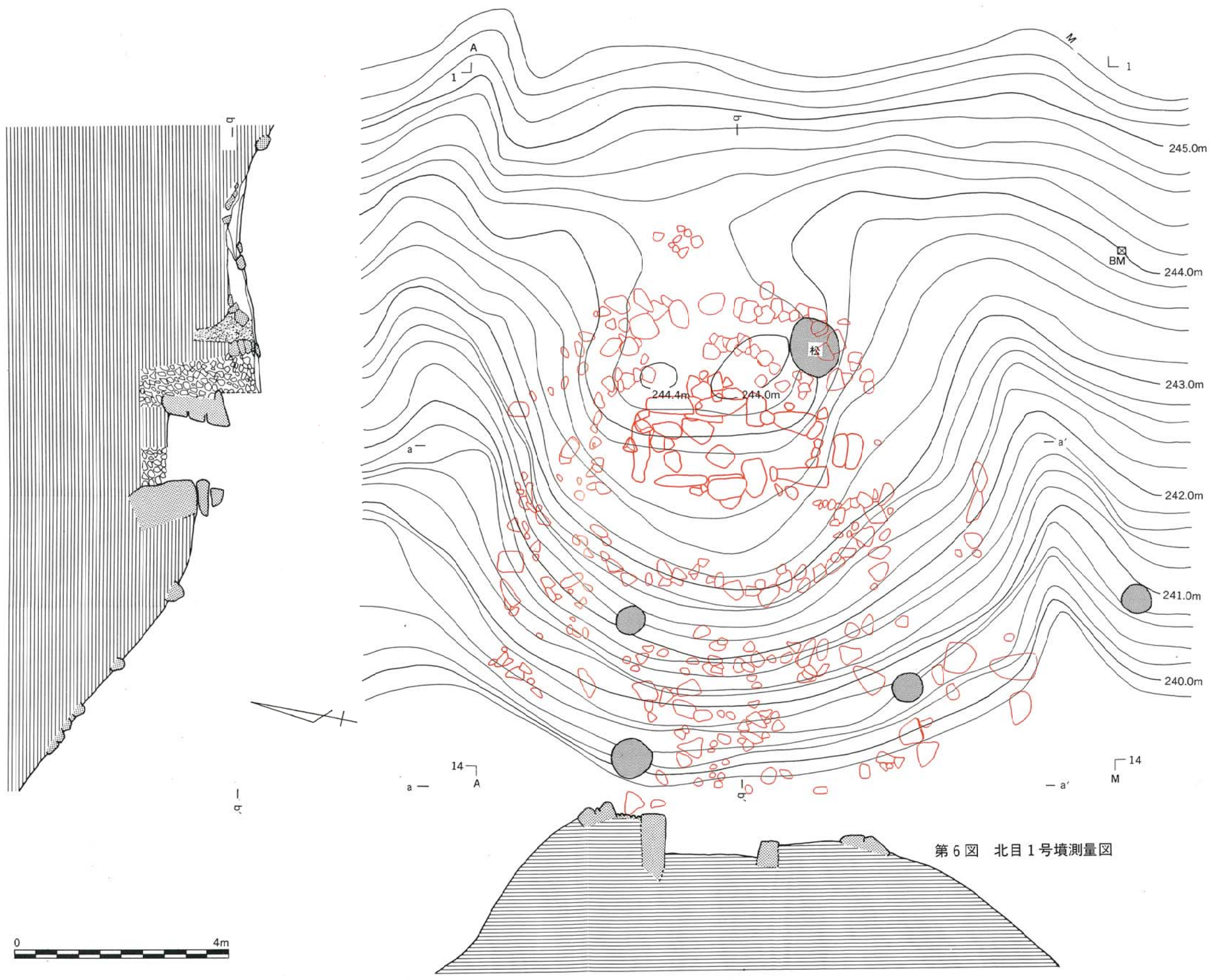
2）石　　室（第5図　図版6）

石室は両袖式の横穴式であり，凝灰岩の巨石及び切石状のものを使用している。後世に採石のため，現伏で天井石及び側壁の上部は持ち去られており，現存しない。羨道も同様に天井部は無くなっている。しかし石室の形状は良く残存しており規模などは確認できる状況にある。現存する石室の高さは，奥壁が1段で0.7メートル，西側壁，東側壁は共に三段で1.15メートルを測る。羨道部は1石一段が残っている。石材は大きいもので1×1.5メートルでいづれも野面石を大割したものを使用している。壁面は奥，側壁ともに下段に巨石を組み上段に長方形の石を積み，間に他の古墳と同様に小礫をつめている。

石室の規模は全長3.3メートル，玄室長1.8，羨道長1.5メートルであり，玄室床幅は1.8×1.6メートル，羨道幅は0.8メートルを測る。床は人頭大の礫が埋め込まれ排水の機能をもつ。閉塞石は1枚でやや斜めに立っている。方位はN－11°45′－Wである。



第5図　北目1号墳石室実測図



第 6 図　北目 1 号墳測量図

3）出土遺物（第7図　図版5）

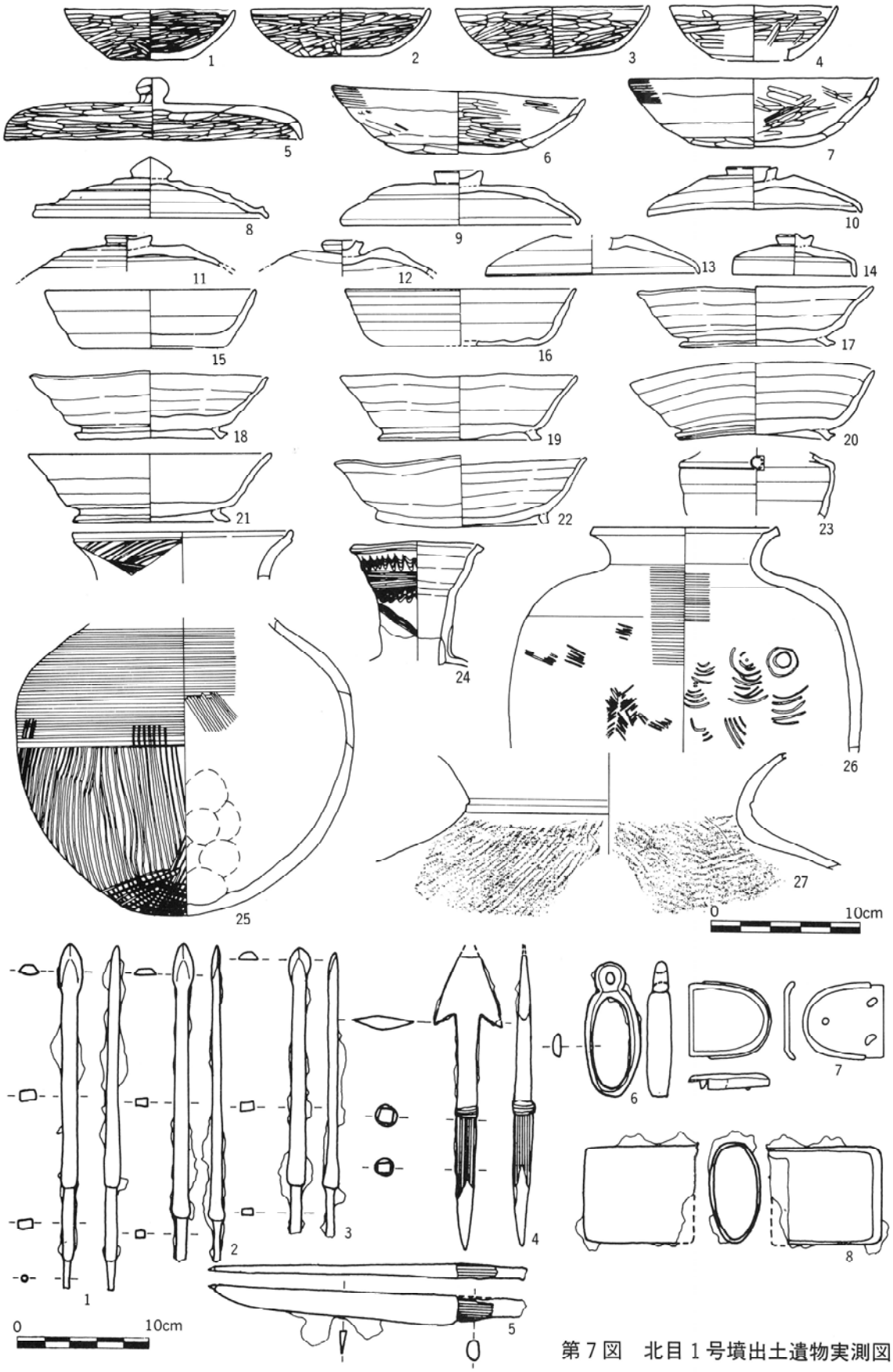
北目1号墳からは，土師器・須恵器・鉄製品など合せて731点の遺物が出土している。このうち鉄製品は玄室内から人骨細片とともに散乱した状況で，土師器と須恵器は羨道および前庭部からややまとまった状況で検出されている。以下順にその概要を記述する。

（土師器）土師器には坏・蓋・甕の器種がある。坏は内面ないし内外面がヘラミガキののち黒色化処理が施されているもので，ロクロは使用されていない。これらは形態および調整技法から，①口径が大きく，丸底で体部外面下半に段を有するもの（第7図6・7）と，②口径が小さく，平底で外面の底部周辺にヘラ削りを有するもの（同図1～4）に分けられる。蓋は天井部がほぼ平らで疑宝珠様のつまみを持つものが2点出土している(5)。口径が大きく，内面に黒色化処理が施されている。甕はすべて細片で器形の復元できるものはないが，内面ないし内外面に刷毛目調整が認められる。

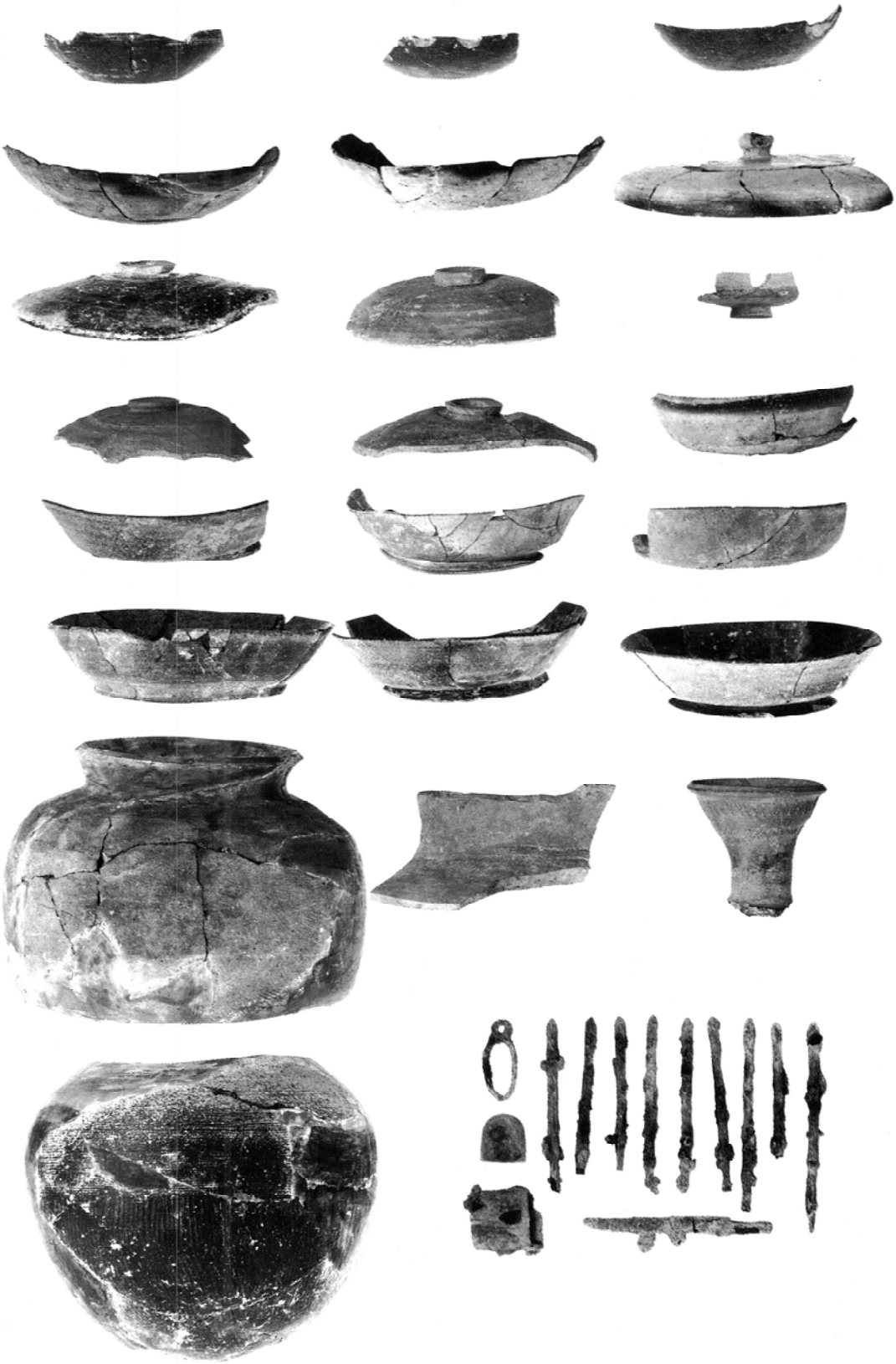
（須恵器）須恵器には坏・蓋・甕・壺・甌の器種がある。蓋はすべて内面のかえりがみられず，天井部外面には肩部付近まで回転ヘラ削り調整が施される。これらは形態および調整技法から，①疑宝珠様のつまみを有し，天井部が丸みをもつもの(8)，②つまみが断面方形の突帯状を呈し，天井部が窪むもの（10･12），③扁平なつまみを有し，天井部がほぼ平坦なもの（9・11）の3つに分けられる。坏は高台を付すもの（17～22）とそうでないもの（15・16）とがある。前者は高台が端部近くに付され，底部には回転ヘラ削り調整が施される。後者は口縁部がゆるやかに外反し，底部の切り離しはヘラ切りによる。壺は短頸壺（24），広口壺（25･26）などの形態がある。14の蓋も短頸壺に伴うものであろう。24は，口頸部が細く丁寧な作りの水注形のもので，体部に頸部を食い込ませる方法をとっている。23は体部の肩が張る甌である。甕は，口頸部が短く直立するものと比較的長く外反するもの（27）が存在する。

（鉄製品）鉄製品は鉄鏃55点，刀子7点，鞘尻金具3点，飾金具一点，佩環4点，帯先金具1点などが出土している。鉄鏃は，鋒部が広根両丸造腸抉三角形のもの（28）と端刃鑿箭式のもの（29～31）に分けられ，量的には後者が多数を占める。刀子のうち34はほぼ全体が残っているもので，全長11.8cmを測る。刀装飾具類としては鞘尻金具(35)や佩環(32)などがある。このほかに注目されるのは33の銅製の鍔帯金具で，帯先に付ける鉈尾と思われるものがある。

北目1号墳から出土した遺物のうち，須恵器類は陶邑古窯跡群による編年IV型式1・2段階に類似するもので，東北地方では宮城県長根A－1号窯出土のものに共通点が認められる。また土師器類も東北地方南半でいう「国分寺下層式」よりはやや古い段階のものと思われる。これらのことから全体としての時期は8世紀初頭から前半頃と推定される。



第７図　北目１号墳出土遺物実測図



図版５　北目１号墳出土遺物

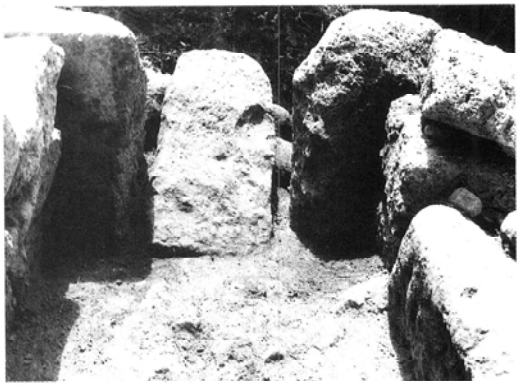
北目１号墳全景（調査前）

北目１号墳・墳丘

壁裏込状況

石室完掘状況

羨門・羨道状況



玄室・閉塞状況

土器出土状況

鉄製品出土状況

2　鳥居町９号墳

北目古墳群に対して最も東端に位置する古墳群である。古墳群は県指定建造物である三重塔・舞楽殿・本殿のある安久津八幡神社境内裏に所在する。大部分は採石により破壊をうけているが現在するもの11基であり，全て円墳で羨道は南に開口している。

１）墳　　丘（図版８）

調査を実施したのは鳥居町古墳群の内東端にある鳥居町９号墳である。本古墳も南面する山腹に山寄せによる横穴式石室をもつ円墳で現状は雑木林である。規模は谷よりの高さ2.6メートル，山より0.2メートル，径約７メートルであり，他の古墳と同様墳頂は石室天井石が露出し一部採石がされており，盗堀の残の攪乱が見られる。墳丘には葺石とまでいかないが凝灰岩の土止めが施されている。

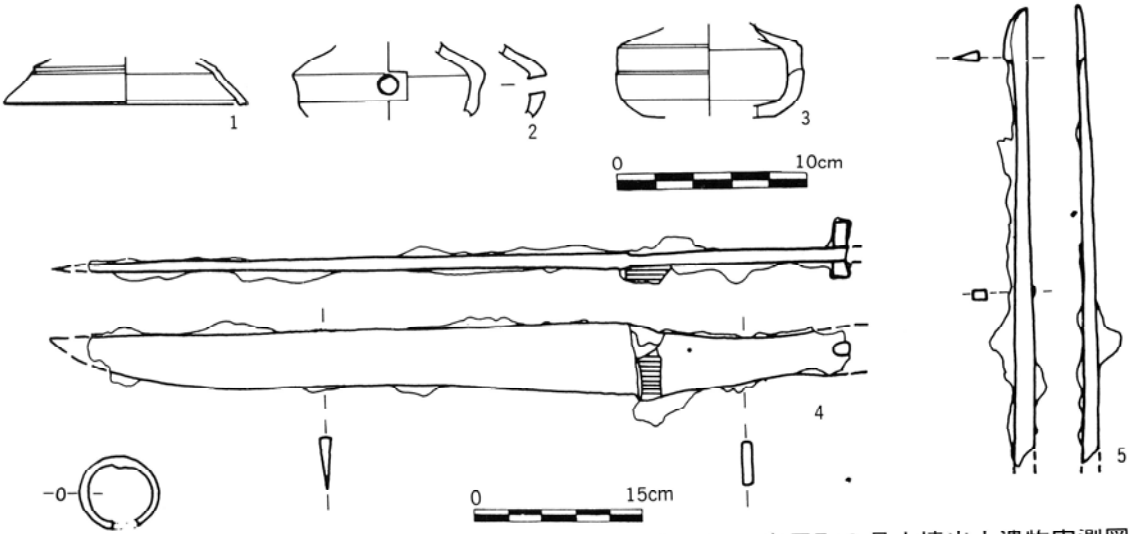
２）石　　室（第９図，図版８）

石室は両袖式の横穴式である。凝灰岩の巨石を奥壁・側壁の下段に据えその上に２～３段の石を積み上げている。天井石の一部は崩落し攪乱の跡が見られる。玄門部は小礫のために若干崩れているがよく原形をとどめている。石室の規模は全長3.3メートルで玄室長1.5，羨道部1.8メートルである。玄室床面は1.5×1.7メートル，羨道幅0.8メートルを測り，また床面からの高さは1.5メートルである。方位N－24°－W。

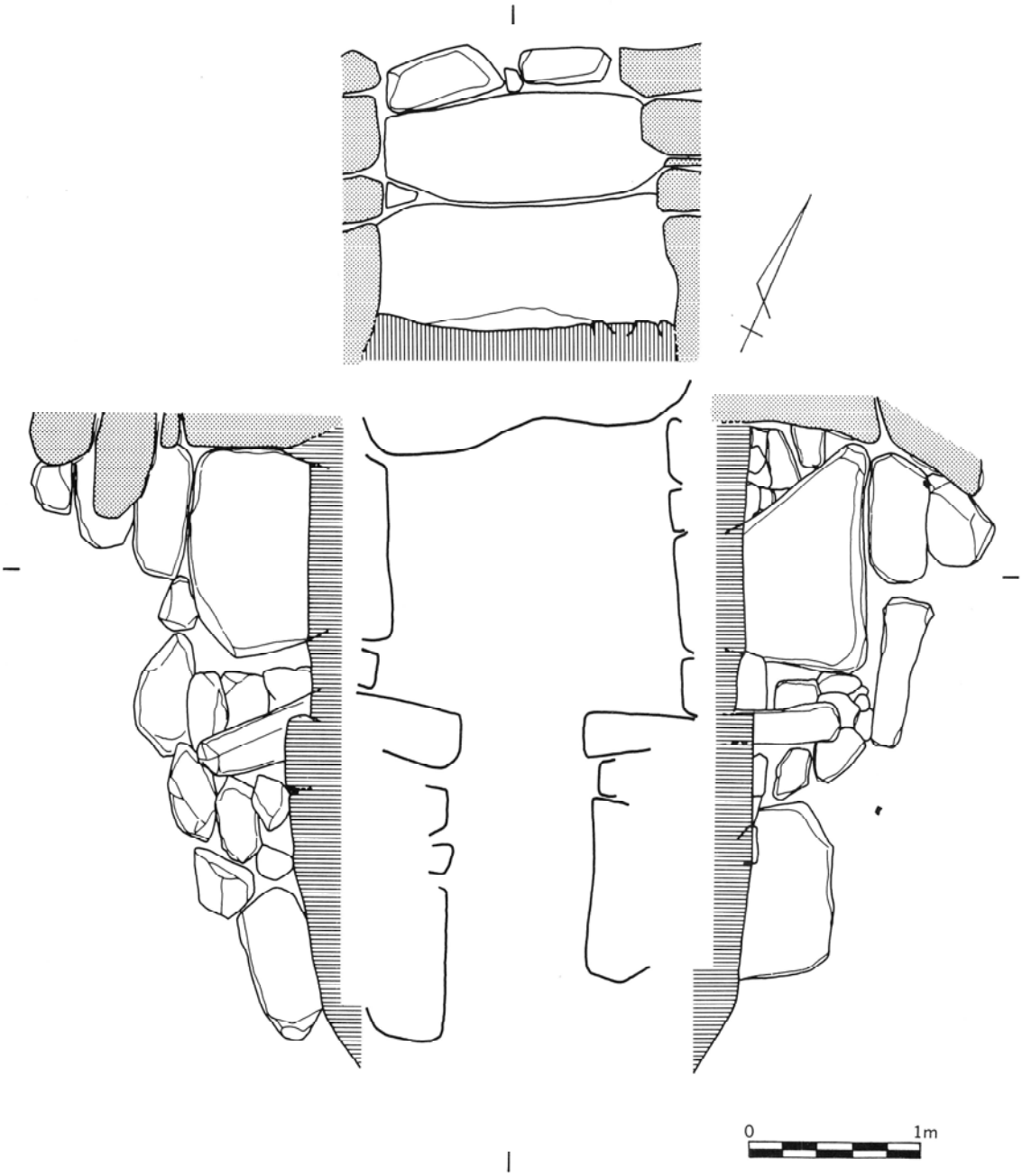
３）出土遺物（第８図　図版７）

鳥居町９号墳からは，須恵器・鉄製品など合わせて18点の遺物が出土している。このうち鉄製品は玄室北西部奥壁近くからややまとまって，須恵器は羨道の前庭部から散乱した状況で検出されている。須恵器には蓋（第８図１）・甕（同図２）・壺（３）の器種がある。小片のため全体の器形を知り得るものはないが，時期は８世紀前半頃に比定できる。

鉄製品は直刀１振（４），鉄鏃１点（５），金環１点（６）が出土している。直刀は残存長22.7cmを測り目釘が残っている。金環は環状にまげた銅地に一部塗金が残っている。



第８図　鳥居町９号古墳出土遺物実測図



第 9 図　鳥居町 9 号墳石室実測図

図版 7　鳥居町 9 号墳出土遺物

鳥居町９号墳全景（調査前）

鳥居町９号墳・墳丘

石室完掘状況

玄室・閉塞状況

図版８

Ⅴ　ま　と　め

１　発掘調査は，昭和56年度に実施した「風土記の丘」構想策定のための実態調査をもとに，高畠町に分布する北目古墳群，羽山古墳群・源福寺古墳群・加茂山洞窟古墳・安久津古墳群・味噌根古墳群・鳥居町古墳群のブロック35基の内，最も西端および東端に位置する北目１号墳・鳥居町９号墳の二基について，性格，規模，時期を明らかにすべく発掘調査を実施したものである。

２　７ブロック35基の各古墳群は本格的な学術調査はなされてなく，出土した遺物の研究から古墳時代後期～終末期の群集墳であることは考えられていたが，個別について究明はされていなかった。従って今回の調査により，北目１号墳は本古墳群の中で希れな外護列石や羨道部前底部に階段上の祭場と考えられる施設を伴う古墳であることが確認された。中でも鍔帯金具の一部である鉈尾の出土は身分を明らかにすると同時に今後の周辺地域の社会制度を考える上で好資料を提供した。北目１号墳・鳥居町９号墳の時期については，前章で述べた如く８世紀初頭から前半と考えられる。

３　安久津古墳群は昭和59年７月17日に県の史跡として指定された。

付　記

発掘調査は，入梅の時期にあたり連日雨の中非常に作業は苦難をしいられた。しかし，高畠町・高畠町教育委員会，同町青龍寺・安久津八幡神社の献身的なご援助をいただき，多大な成果を得ることが出来ました。深く感謝申し上げます。

1　調査は文化課佐々木洋治・佐藤庄一が担当し，高畠町教育委員会志賀幸一文化課長同郷土資料館井田秀和学芸員の協力をいただいた。また発掘作業にあたっては高橋吉博・井上精一・斎藤昭・斎藤進・菅野実の各氏に労を煩らわした。

2　報告書作成にあたっては，佐々木洋治・佐藤庄一が執筆し，資料整理，図版作成を佐藤正俊が村山正市・三沢友子がこれを補佐した。編集は渋谷孝雄が担当し，さらに全体については佐々木洋治が総括した。

3　本書は，写真・図版を中心にしたものであり，不充分な点はご容赦願いたい。

〈参考文献〉

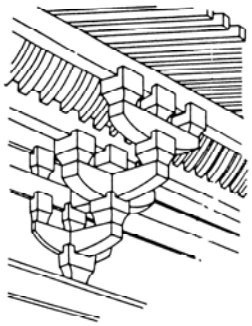
柏倉　亮吉　（1953年）　『山形県の古墳』山形県教育委員会

佐々木洋治　（1971年）　『高畠町史』別巻　考古資料編　高畠町

桑原滋郎他　（1976年）　『長根窯跡調査報告書』　涌谷町教育委員会

中村　浩　（1981年）　『和泉陶邑窯の研究』　柏書房

山　形　県　（1982年）　『山形県史』　第1巻　原始・古代・中世編



裏表紙のマークは昭和41年5月に定められた**文化財愛護のシンボルマーク**です。これはひろげた両方の手のひらのパターンによって，日本建築の重要な要素である斗栱（ときょう）（組みもの・左図参照）のイメージを現わし，これを三つ重ねることにより，文化財という民族の遺産を過去・現在・未来にわたり永遠に伝承していくという愛護精神を象徴したものです。

山形県埋蔵文化財調査報告書第95集

県指定史跡

安久津古墳群

北目1号墳・鳥居町9号墳発掘調査報告書

昭和60年3月20日　印刷
昭和60年3月25日　発行

発行　山形県教育委員会
印刷　㈱大風印刷